

抑留回想

岐阜県 鈴木義彦

一、ソ連軍侵攻前

イ・昭和十六（一九四一）年兵現役入隊、守山騎兵

第六八九部隊満州鉄嶺部隊編入―樺林部隊再編

―部隊主力南方作戦派遣残留部隊集結後、海拉爾^{ハイラル}

戦車機動隊再編成駐（連隊本部付要員）

ロ・当時、興安嶺陣地構築（周辺各種部隊編成）、

作業隊長（田川大佐）、当部隊長野宮本部付

ハ・戦況急迫、動員再編成後南方作戦移動、残留部

隊は兵器装備皆無（重機関銃等）。軍馬共々南方

移動（軍馬なし騎兵隊と化す）

ニ・侵攻は博克図^{ハクコクト}。突然のソ連軍侵入の報に接し、

各部隊において個人のたこつばを掘って箱爆弾を

抱え、対戦車撲滅作戦により待機せり。興安嶺越

し飛行機飛来しドイツ軍製ダムダム弾攻撃、発射

音と着地と同時に爆発、殺傷する。我が軍対戦飛行機皆無にて一方的攻撃受く。

二、終戦（武装解除）

イ・ソ連機甲部隊博克図侵入。現地満人住民に日本

軍三八歩兵銃携行させ、部隊包囲と同時に兵器類

没収集積され、個人私物も撤収。

ロ・当時、軍師団司令部は博克図移駐。司令部にお

いて詔勅あり結集、雑音多く聴取不能あり。山中

設置無線室移行（無線班長勤務）聴受。

ハ・司令部要員のみ直ちに退散、飛行機にて女子職

員同行。暴行等大混乱、痛激なり。

ニ・旧日本軍駐留兵舎に集結され（有鉄線包囲）、

監視塔四隅にてソ軍警戒配備。

ホ・他部隊と混同収容され、他部隊においては分隊

長以下集合、手榴弾同時爆発による自爆。室内肉

血散乱、血の海と化す。

ヘ・兵舎周辺の満人農作物徴収に行き、兵舎柵内撤

入と同時に射殺され、無念憤慨せり。

ト・結束を配慮か、将校は旧満鉄宿舍に、兵は旧兵

舎に別々收容され、連絡委員より連絡文面徴集される。解読要請となる。その文面解読のため、ソ軍より要求ありて、当時連隊本部付として私が応ずることとなり、ソ連軍最高指揮官大佐、白髪白髭の長身者と旧白系ソ連人通訳と監視兵共に兵舎前旧将校宿舎において、没収文面解読のため徹底した質問あり。主として将校より官物食事等の要求多く、内容通りの解読であったが、一件強烈なる反戦文面の連続、このままでは大変な事態になりかねないと判断、全く反対の内容を説明すると、白系通訳がストップかけた。今、どこ読んだか質問あり、即座にここだと文面を見せると、彼はこの文字は満語で言うところという意味だ、お前の言うことはデタラメで嘘だと怒鳴りつけられた。即座、窓際に立たされ、マンドリン銃を持つ軍曹が眼前に銃を構えた。一瞬目を閉じ無念中、突然抱かれて屋外の車に乗せられた。兵舎柵内では連日係留されている私を心配してか多くの兵が集まっていて、大声でそれぞれ心配してしてくれ

た。通訳曰く、お前は嘘を言っているから連隊長前で銃射をすると言った。覚悟はできていた、別に驚くことではなかった。宿舍到着、連隊長はじめ中隊長、各部隊将校多数参集包囲された中、連隊長曰く、敗戦した、遺憾残念ながら相手の要望に従ってくれとの一言。面前射殺もなく、満鉄高級舎に連行され、意外なる特別待遇を受けた。その間、指揮官の要求により将校携行軍刀の良否の選別、並びに各種軍人勲章功一級金鶏勲章等、よくもこんな多数集めたものだと感心する中で上位を選別した。その中でお前にも一つやると言ってくれた。私は功二級金鶏を選んだ。後ソ軍に没収された。その後、ソ軍兵同行により收容先の兵舎に戻るも、心配していた友の大歓迎を受け感激、まずは一安心。

チ。ソ連軍は、アメリカ製大型軍事トラック数十台単位と満鉄等、同時昼夜連日、満州国内諸物資とともに軍事物資を輸送、国境越え路線両側、山稜留まることなく延々と続いた（入ソ時見極めた）。

三、シベリア抑留地への旅

イ・収容抑留中の兵は、帰国願望待機中は現満州国内は内乱あり極めて危険のため輸送困難であり、沈静の上輸送をすと言ひ、ついに冬期十一月末に至り満服を支給され帰国の途につくこととなるも、依然と国内輸送は困難と言ひ、ソ満国境線にて輸送することになり、満鉄貨車内部は急製木枠にて二段ベッドが両脇に造られていて、正にすし詰め搭乘させられ発車した。

全員安堵か心配か、複雑な思いの中で進行した。不安の中、進行中太陽の光だんだん西方に傾き、ついに線上真上に左方向へと進む。ソ連領だ、騙されたと大声が飛ぶ。車内騒然、怒り爆発、いかんともしがたく涙をのむより致し方なかった。車内の天窓、小さな窓より眺めると、先に記述した物資延々と山積みされている。鉄橋に差しかかった時、突然貨車の扉の隙間から数人が飛び降り騒然となる。

ハ・着駅名はソ連領鉄路上ノーバヤという駅だっ

た。意外にも停車中の貨車の穀物を狙ひ、原住民がおんぼろの衣服を纏い、日本人で言えば乞食^{こじき}同様の人々が南京袋の糧秣に穴をあけ、洩れる糧秣を両手で掻き集め、数人が競い合い袋に詰めている。意外の実態に呆然とした。ソ連兵は黙認し注意はしなかった。路線上にこぼれた糧秣をも掻き込んでいる、あまりにも地獄の境地を見て、兵は私物の物品を数々与えた。あまりの光景が脳裏より離れない思い。

駅着後直ちに三日二夜の不寝強行軍に入った。途中寸時の野営のみで我々は極度の体力消耗、歩行困難に陥りながら、盟友励まし助け合いながら行進す。

ニ・着いた収容所は粗末な丸太造り。旧ドイツ兵の収容跡地で、主として伐採と松脂採集作業をしていたようだった。

四、労役

イ・我々の編成隊は二千人編成であり、主な作業は伐採作業であった。作業出発時、人員点呼。五列

縦隊数えるのに初めから数回繰り返し、一回で済むことが一度もない程。数分雪の中に立たされ、震えた。作業場は延々深雪悪路で数キロ、その上作業で、二人一組で松の大木直径一メートル以上。伐採ノルマは一組三本以上と過酷ノルマ、達成はとても無理。芯まで凍りついた松木は容易に鋸が進まない。苦戦の連続結果、倒木、大声で周辺に知らせ危険排除し倒す。松葉積雪する大木は、大地に倒れると同時に一本の大木となり、枝葉は径三十センチ以上でも元から凍結のためにフツ飛んでしまう。そのため思わぬ重傷者も出る、何と過酷な作業かは言語に絶する。死者も出た。正に地獄境地だ。その大木を鉄道路線広軌の倍の長さに割り切り作業切断。これを源流河川の堰堤に運搬。数百メートル以上を一組十六人、前後八人ずつで鈴なりとなり、ヨイコラショヨイコラショの掛け声に合わせ一步一步前進。皆肩が腫れ上がり蝟になってカチカチで、最も重労働で疲労困憊この上なし。

やがて夏期に至り雪解け水の流水を利用、流木作業が始まり、途中流木が重なり合い集積、流木不能解除のため流木上に立ち棒一本で操り、一歩間違えば流木と共に流され圧死の危険あり、正に地獄絵巻。この作業で数人の命が流された。残酷極まりなき作業であった。中には重労働疲労極限に達し、流木と共に生命を断つ願望者もあり、人選苦慮。

○ ラーゲル周辺囲み作業始まる。周辺松木の直立木選定、長さ十メートル以上、伐採運搬。一辺百十数メートル四周、一部衛門ありを、凍結地掘削で一メートル以上掘り、隙間なく松木連立。松木倒立本作業は別途重作業により強要され、自らラーゲル包囲する。

その後、ジンビルカ収容所を後にノーバヤ収容所に移動させられる。作業は住宅建設、丸太積上げログハウス。基礎から棟上げまで、十数棟建設に当たる。ほかに製材木工所において鉄道枕木製造、及び現地人指導により松材による大桶製造、

または鉄道輸送による原木丸太貨車搭載作業、昼夜を問わず連日重労働だ。

ハ・ハウス建設は、基礎丸太の上にもう一本の丸太を重ね、合わせ目をコンパスで印を付け、上の丸太の底部分に印に沿ってタポール斧で深さ一五センチの溝を掘り、中間に乾燥した水苔を挟んで積み重ね壁面を造る。天井はスノコ作りの板並べ、その上に土を乗せる。内壁に石灰を水溶きして一面に塗り上げる。

ニ・十数両の無蓋車に丸太搭載だ。貨車いっぱい長さの丸太を、前後にロープを掛け、一方十数人ずつで引き巻き、転がし積み込む。一貨車五段積み程の高さに巻き上げる。危険で大変、不眠の重労働である。ただただダモイ、祖国に帰り故郷の土をこの足で踏む夢見て、体力限界を越えながらも耐えがたきを耐え、現在では考えられない程、生の執念に徹せねば生はなし。

ホ・洗脳教育について、当時自主的に盟友発行の日本新聞が発刊され一般配布されていたが、私は特

別アクチーブと銘ある教育を受けざるを得ずして、マルクス・レーニン主義の史的弁証法、唯物論等を徹底的に、また共產主義理念を植え付けられ、強要された。その後帰国のためと言われ現ローバヤよりナホトカに移り帰国を待つも、何と当地において一年半有余滞在させられ、主としてブロック造りの四、五階建てドーマの建設に基礎から完成まで。その間、帰国の盟友を数回にわたりに互いに手を振りながら大声で元気でなーと交わりながら送出した。中に同郷の友あり、家族に元気であること伝えてくれと頼み、送った。彼の行列進行中の一時である。

五、抑留中の生活と極限状態の意識

申すに及ばず、飢えと寒さと重労働とともに極度の栄養失調に陥り、驚くなかれ、信じられない最悪の事態。当初二千人編成中、一冬越え明けには何と千数百人が死亡、残るは八百有余人。昨夜、すし詰めの就寝、両脇の友、特に何語ることもなく床に就き、朝起きて見ると意外や意外、両脇の友は冷たく

語らず他界。夢の故郷を偲ぶ無念の姿、ただ両手で友の手を握り、明日は我が身と涙止まることはない。こんな馬鹿なことがあってよいのか。これが現実だ。

その後一カ月程、私は意識不明に陥り一週間以上寝たきりの状態の中、突然半身起き上がり、隣の友の食事を取り夢中で食べ始めたとのこと。周辺の友はただただ呆然と驚き見ていたという。そのとき岐阜出身の軍医さんが私にドイツ軍保有貴重薬を投棄下されたことを、衛生看護の友、四国出身山口君が驚異的生還を祝し語ってくれた。現在も彼とは命の恩人と深く交情中。当時は皆、不法侵入のソ軍は許せない、生ある限り絶対仕返しのための命と我が身に誓っていた。

六、帰還

帰国のためナホトカに来て一年有余、その間建築作業に当たり、漸く帰国を知らされ半信半疑のまま輸送基地に着く。安堵したが乗船「明優丸」は入港しない。その間、私はかつて準備していた岐阜県出

身兵指先遺骨数体を保存して、必ず遺族に渡すべく住所録を記名し、かんじょより（こより）にして衣服の衿の部分に縫い込み保管していたが、乗船時の私物検査が厳しく遺骨と共に没収され、無念の涙に暮れざるを得なかった。

乗船―舞鶴上陸、諸検査手続後帰郷。悲運が重なり既に両親は他界、住居もなく、長兄宅において貿易業の手伝いをし苦難の末、結婚と同時に自営独立する。後、苦難の末築き上げた住宅、工場が隣家よりの出火で全焼。再起不能、焼却。後地、借入金、再建を次女に託し、公務員として勤め、あまりにも険しい紆余曲折の人生を余儀なく過ごしてきた。

七、現在

復員し、長兄経営貿易商協力後、独立。上絵付加工業組合理事務め、五十三年隣家より出火、大火災、隣接家屋七軒全焼。再建喫茶店開業、次女専任。我が市スポーツセンター管理職十五年。退職後、老後保養に徹す。八十歳に至る。

【執筆者の紹介】

昭和五十七年、全抑協岐阜県連合会発足以来、本部役員として会勢の拡大に努力をされ、財団認可以降は支部の事務局長として活躍、岐阜県支部の活動の中心人物として、その行動を高く評価しております。

彼は誠実な人柄で地域に密着、自治会、上絵付加工組合の理事、県立高校のPTA会長を務めるなど多くの役職を歴任、厚い信頼を得ておられます。

現在は悠々自適の毎日で、良き家庭に恵まれてうらやましい限りです。小生のまたとない相談相手であります。

(岐阜県 鈴木 善三)

シベリア抑留記

愛知県 近藤 昌三

一、入隊前の略歴

私は大正十五（一九二六）年、名古屋で生まれた。

中学校入学の前年に蘆溝橋事件、中学卒業の前年に日米開戦となった。名古屋市立商業を昭和十七（一九四二）年暮れに繰上げ卒業となり、縁あって某綿花貿易会社の中国研修生として中国へ渡った。北京で約十カ月の中国語速成教育の後、河北省石家荘近くの農村駐在員となり、電気、水道もない田舎で中国人職員を使い、八路军ゲリラによる殉職覚悟で約一年半、綿花取引に従事した。

二、北支派遣軍入隊、終戦

徴兵年齢の引下げにより、昭和十九年、石家荘にて検査を受け、昭和二十年四月一日、山東省張店の部隊に入隊した。約五十人の新兵は、張店近郊の分遣隊にて教育を受けたが、三八式歩兵銃は支給されず、鹵獲銃で教練を受け、専ら対戦車肉弾攻撃の訓練だった。

第一期の検閲を受けて配属された部隊は「北支派遣独立歩兵第四二九四部隊」で、山東省泰安付近にいたが、七月下旬、列車にて移動。一旦南朝鮮に入ったが、北上して北朝鮮咸興付近に駐屯中、終戦の玉音放送を聞くこととなった。武装解除されたが、軍規は正